

# KSKPコリアボランティア協会ニュース, No.34 (1999.4.5号)

コリアボランティア協会編集部編

発行:大阪 : コリアボランティア協会, 1999.4.22. ; 8,[2]p

請求記号:震災-7-z82

※震災関連記事のみテキスト化しています

---

<阪神大震災－復興支援>

## 被災地発、全国のみなさまへ

被災された方への励ましの手紙やカンパを送って下さる全国のみな様、変わらぬご支援ありがとうございます。

「仮設全廃」策が打ち出される中、関係が断ち切れ、仮設でも移転先でも、ますます、高齢・障碍の方の孤立化が深まっています。今後の支援のあり方はどうあるべきか、実践を元にした被災地での1日をふり返りながら考えてみたいと思います。

毎週火曜日、午前、神戸市長田区の西代仮設“あおぞら広場”前、当協会出張所を置かせてもらっている“長寿友の会”の長尾代表の準備した食材を積んで、共働のボランティアの方と共に移転先での食事会に向う。

この日は、M電器の提供で、補聴器プラザの方も同行し、聴力検査と補聴器の配布も実施。食事の後、移転後の話を聞く。仮設を出たものの、体調が悪化、入通院がちになり、その上ますます孤立感がつのっているとの話。全国からの手紙・文集や補聴器などを手渡し、次の訪問を約して復興住宅を後にする。

毎週の食事会も軒数がふえれば間隔があき、今後は地域でケアができるようコミュニティ作りが急務。そんな思いで、食事会の後、地域の小中学校を回り、校長先生や復興担当の先生に“全国文通文集”の地元配布を呼びかける。被災地発で、子供たちとお年寄りが日常的に顔を合わせられる空間の必要性を訴えて行きたい。

長寿友の会は24時間体制で高齢者ケアに従事、その受け入れの元、当協会からは金曜日にも有志の訪問を実施、今後も支援を継続できます。震災を風化させず、犠牲を教訓に変える為にも、今後共、ご支援・カンパをよろしくお願いいたします。

※2面に長尾さんの記事掲載

<鄭チョン>

[写真あり 移転先での食事会、手紙・文集、補聴器も配布 省略]

---

## 震災より1,475日をふりかえる

1999年1月末日現在

あのいまわしい大震災より、4年の月日が流れてしまった。地は叫び、空は6,450人の尊い命が魂が燃え上がり、真っ赤に染まった大人も子供も泣き叫び、尊い命が炭となり土となった。そこには神も仏も入り込む事は出来ず、

苦しみがあり、悲しみがあり、今も涙は流れつづけている。避難所から少しのやすらぎを求め移り住むが、仮設には喜びも笑顔も無く、ただ線香の臭いが何処からと流れてくる。

私達家族は平成7年8月21日に、長田区にある西代仮設に移って参りました。そうです、行政が食事の支給を打ち切った日です。でも仮設は避難所よりもひどく、人の住む場所ではありません。平成7年8年9年は、一週間を待たずして命の灯が消えて行く。平成10年では、一ヶ月に一人というペースで亡くなっています。私の住む西代仮設だけでも、今日平成11年1月現在で、39名という尊い命が二度とかえらぬ人となっています。

兵庫県神戸市は、やってもやらなくてもよい明石大橋のライトアップ、12月のルミナリエ、被災者よりも人の命よりも神戸空港を優先とする県政、市政。何か間違っていないですか？ 天災は完全に人災に変わり、社会的な殺人となっています。震災から4年、いろんな事はありませんが、私は神戸に育ち、神戸で生活を送ってきましたが、兵庫県に、神戸に住んで、本当によかったと思った事は一度もありません。でも悪い事ばかりではなく、心あるコリアボランティア協会の方々には、心より感謝し、ありがたく思っています。

又、この震災で何よりも人を愛する事、優しさ思いやりが、いか程に大切な事かと言う事を知らされ、勉強をする年月となりました。

私の住む西代の仮設には、今だに92世帯160人が、毎日を懸命に生きています。これからも、仮設全員が生きて仮設を出る事の出来る日まで、お年寄り達と手を取り合い、前向きに生きて行きたく願っています。

神戸・西代仮設 長寿友の会代表 長尾 政三